

## 天海版一切経の目録について

松 永 知 海

### 一 はじめに

一般的に大蔵経研究は時間と労力がかかる割にその成果が少ないとされ、大正より昭和の初期の研究を無批判に踏襲してきた感がある。

天海版一切経の巻数について、平成元年に復刊された京都大蔵会編の『大蔵経―成立と変遷―』においても、

その着手は寛永十四年（一六三七）三月十七日（はじめ）てその第一巻を刊行し、十二年をへて慶安元年（一六四八）三月十七日（いた）ってその功を結んでいるが、天海はその完成をみず寛永二十年（一六四三）十月二百八歳の高齢で示寂している。『日本武州江戸東叡山寛永寺一切経新刊印行目録』五帖（以下『印行目録』と略称）は、その出版目録である。その版元は毎行十七字詰、二十四行を四折とした折帖で、全蔵は六百六十五函、一千四百五十三部、六千三百二十三巻であった。

としているが、ここに記されている刊行年月および函数、部

数、巻数は、実は『印行目録』の巻第五の末尾に

部数一千四百五十三部

巻数六千三百二十三巻

函数六百六十五

寛永十四丁丑三月十七日始刊行之到慶安元戊子三月十七日経歴十二年而終其功焉（中略）日本武州江戸東叡山寛永寺 山門三院執行探題前毘沙門堂門跡慈眼大師天海願主 慶安元年戊子曆三月十日

とある記載を、そのまま踏襲したものである。

そこで、筆者が昨年九月より五月まで実施した京都山科毘沙門堂の天海版一切経の目録作成作業より判明したことに基<sup>(1)</sup>づき、その出版目録といわれる『印行目録』の成立の性格について私見を述べてみたい。

山科毘沙門堂はいうまでもなく、天台宗門跡寺院として知られているが、もともと出雲寺とよばれ、左京京極出雲路にあり、毘沙門天が祀られていた。それが近世になつて廢絶し

ていたのを慶長年間の末に後陽成院から天海が毘沙門堂の号を賜わり、寺を再興することを命じられた寺である。天海が亡くなるに及んで法嗣の公海は將軍家綱の援助を得て、寛文五年（一六六五）山科の現在地に寺領を賜わり、堂宇を調べた。経蔵は寺伝によると天和二年（一六八二）完成したと伝えられ、二百九十函に一切経が納められた。現在も一函に二帙ないし三帙が入れられ、そのほとんどが伝存している。<sup>3)</sup>

## 二 目録の問題点

### 部数について

周知のように、『大正新修大蔵経昭和法宝目録』第二巻の中には『印行目録』五帖がすべて翻刻されていて、<sup>4)</sup>以下『法宝印行目録』、さらに各経典名の頭には原本にはない通番が算用数字で付けられている。

いま最後の最函の『法宝印行目録』五巻をみると、その頭には1449という番号が付けられている。すると四部足りないことになる。この素朴な疑問について、従来なんの指摘もなされていないようである。

そこで、『法宝印行目録』（以下経典名頭の算用数字は『法宝印行目録』の番号）をはじめから調べてみると、

534 仏説法常住経

534 仏説長寿王経

天海版一切経の目録について（松 永）

となっていて、534番が重複していることが判った。<sup>5)</sup>

次に、717『仏説十支居士八城人経』の後には『印行目録』によれば『佛説邪見経』があるが、それをとばしてつぎの『佛説箭喻経』に718と記している。その原因は、

717 仏説十支居士八城人経

後漢安世高訳

説邪見経

失訳今附宋録

718 仏説箭喻経

失訳今附東晋録

とあって、<sup>7)</sup>仏説邪見経の仏の字を脱落したことで経典として数えなかった、と考えられる。

以上、『法宝印行目録』の遺漏を補うことができた。

つぎに調査によって二点補える。まず一点は、55 仏説大乘方等要慧経一卷の後に『弥勒菩薩所問本願経』一卷が抜けていることである。この両経の千字文巻次は共に「推十」で両経合巻（帖）である。全十一紙で巻末には音釋と正保三年願文が付されているが、分量からすると仏説大乘方等要慧経一卷は第一紙の二十行目まで、『弥勒菩薩所問本願経』一卷は同紙二十二行目から第十紙二十行目（音釈の三行分を含む）までである。内容的にも前者が『大宝積経』の「弥勒菩薩問八法會」の異譯であるのに対して、後者は弥勒六部経にも数

えられる重要經典であるから、單純に初めの經典名だけをと  
り、見落してしまつたものであらう。

もう一点は536菩薩善戒經十卷という記載についてであ  
る。これだけ見ると十卷本の『菩薩善戒經』があるかのよう  
であるが、実際には九卷本と一卷本とにわかれる。ともに同  
名經典で「劉宋闍賓三藏法師求那跋摩等譯」とする。この  
「賢函」は全十巻で、一卷本は九卷本のあとにある。智昇の  
『開元釈教録』第十二によれば、<sup>(8)</sup>

今按尋經本与祐記不同。經初即有如是我聞而無優波離問受戒法。  
但有九卷其優波離問受戒法即後单卷菩薩善戒經。是若將此為初卷  
即与祐記符同

といい、僧祐『出三藏記集』の記載を検討し、この九卷本と  
一卷本とは本来一具で、一卷本を初巻としていたものが、別  
行されてきたことを伝えてゐる。同じ經典名で同じ訳者であ  
つても一部として扱つてよいことにはならない。たとえば2  
19と220は同名の「仏説睽子經」といい、翻訳者もとも  
に聖堅であるが別出している。このように九卷本と一卷本と  
は本来分けて数えられるべきであらう。

以上の検討から、天海版の部数は『印行目録』の記載通り  
一四五三部と確定できた。

巻数について

『印行目録』は千字文函号のつぎに函の全巻数を記し、さ

らに經典名とその巻数を記している。これについて、千字文  
函号の全巻数を記載の通り合計してみると、五七九二巻にな  
る。『印行目録』巻末に記載の全巻数は六三三三巻であるか  
ら五三一巻も違いがでてくる。

天海版一切経を五七九二巻とするのは、第六回京都大藏会  
の展観目録<sup>(9)</sup>に五七九二帖と西本願寺所藏の天海版一切経を記  
している他は知らない。これについても、実際に經典に照し  
て数えてみると、実数では五七八〇巻となつて、さらに一二  
巻少ない。これらはつぎの七函について巻数記載の誤りがあ  
つたからである。<sup>(10)</sup>

『印行目録』莫函は十巻とするが、各經典に記載する巻数  
は次の通りで、実際も合計九巻である。

十住断結經 余五巻

仏説未曾有因縁經 上下二巻

諸仏要集經 上下二巻

欲函は十一巻とし、各經典に記載する巻数も次の通り合計  
十一巻であるが、法集經七巻は實際は六巻である。

法集經 七巻

觀察諸法行經 四巻

言函は九巻とするが、各經典に記載する巻数は次の通り  
で、實際も合計十巻である。

摩訶女經

摩登女解形中六事經 右二經同卷

摩登伽經 上中下三卷

舍頭諫經 一卷

鬼問目連經 右三經同卷

雜藏經 右三經同卷

餓鬼報応出雜藏經 右三經同卷

阿難問事仏吉凶經 右三經同卷

慢法經 右三經同卷

阿難分別經 右三經同卷

五母子經 右四經同卷

沙弥羅經 右四經同卷

玉耶經 右四經同卷

玉耶女經 右四經同卷

阿遯達經 上下二卷

修行本起經 上下二卷

辭函<sup>(13)</sup>は十卷とするが、各經典に記載する卷数は次の通り

で、『佛説淨業障經』に卷数の記載がない。この經は一卷で

あるから、實際は合計十一卷となる。

太子瑞応本起經 上下二卷

過去現在因果經 四卷

四十二章經 四卷

法海經 右三經同卷

海八徳經 右三經同卷

天海版一切經の目録について(松永)

仏説奈女耆城因縁經 一卷

仏説淨業障經 一卷

仏説奈女耆婆經 一卷

仏説罪業報応教化地獄經 右三經同卷

仏説龍王兄弟經 右三經同卷

長者音悦經 右三經同卷

縣函<sup>(14)</sup>は十三卷とするが、各經典に記載する卷数は次の通り

で、同卷のものを別に数えているが、實際の合計は十卷である。

仏説大摩里支菩薩經七卷 合本五卷(卷四と五、六と七が合卷)

一切如来大秘密王未曾有最上微妙大曼拏羅經五卷 合四卷(卷二

と三が合卷)

仏説普賢菩薩陀羅尼經 右二經同卷

大金剛妙高山樓閣陀羅尼經 右二經同卷

驅函<sup>(15)</sup>は九卷とするが、各經典に記載する卷数は十卷で、実

際も合計十卷である。

用函<sup>(16)</sup>は十九卷とするが、各經典に記載する卷数の次の通り

二十卷である。佛説海意菩薩所問淨印法門經は正しくは十八

卷で、また實際には二卷同卷として数えているから、全九卷

で次經一卷との合計は十卷である。

仏説海意菩薩所問淨印法門經 十九卷

二二九

仏説聖觀自在菩薩不空王秘密心陀羅尼經 一卷

以上、それらの異同部分を一覽にしてみると、次の通りである。

千字文（経番） 『印行目録』 実数

莫（391） 十卷 九卷

欲（411） 十一卷 十卷

言（761） 九卷 十卷

辞（778） 十卷 十一卷

縣（1151） 一三卷 十卷

驅（1248） 九卷 十卷

用（1446） 十九卷 十卷

經典名について

つぎに、実際の經典名（首題）と『印行目録』（『法宝印行目録』にはさらに誤植があるが、ここでは記さない）との違いを明らかにしたい。ここでは、『印行目録』第一巻に限ってその違いを載せる。

『印行目録』 經典首題

12 金剛能断般若波羅蜜經↓能断金剛般若波羅蜜經

40 阿闍世王女阿術達婆菩薩經↓阿闍世王女阿術達菩薩經

42 郁伽迦羅越門菩薩行經↓郁伽羅越問菩薩行經

58 大集月藏經↓大方等大集月藏經

67 大集菩薩念仏三昧分經↓佛説大集菩薩念仏三昧分經

74 大集譬喻經↓大集譬喻王經  
105 羅摩伽經↓佛説羅摩伽經

107 後分涅槃經↓大般涅槃經後分

131 佛説佉眞陀羅尼如來三昧經↓佛説佉眞陀羅尼如來三昧經

163 新譯大乘入楞伽經↓大乘入楞伽經

182 佛説灌頂魔封印大神呪經↓佛説灌頂伏魔封印大神呪經

200 彌勒下生經↓佛説彌勒下生經

280 佛説灌頂經↓佛説灌頂佛經（相違部分筆者加線）

以上十三件のなか、「佛説」が經典題名に付くか、付かないかという違いだけではなく、280番のように「灌頂」と「灌佛」というように全く違った内容をさすような間違いもある。このような、誤りは刊行の最後に出版された『印行目録』とは思えない粗雑さといえよう。

經典配列について

さらに、『印行目録』と実際の經典との違いとして經典配列の順序があげられる。

『印行目録』 実際の順序

68 大方等大集賢護經五卷 般舟三昧經三卷

69 般舟三昧經三卷 跋波菩薩經一卷

70 跋波菩薩經一卷 大方等大集賢護經五卷

2 1 7 佛説太子沐魄經 太子須大拏經一卷

2 1 8 佛説九色鹿經 佛説睺子經

2 1 9 佛説睺子經 太子慕魄經

2 2 0 佛説睺子經 佛説太子沐魄經

2 2 1 太子慕魄經 佛説九色鹿經

2 2 2 太子須大拏經一卷 佛説睺子經

5 4 0 佛藏經四卷 菩薩瓔珞本業經二卷

5 4 1 菩薩瓔珞本業經二卷 菩薩戒本一卷

5 4 2 菩薩戒本一卷 菩薩戒本經一卷

5 4 3 菩薩戒本經一卷 菩薩戒羯磨文一卷

5 4 4 菩薩戒羯磨文一卷 佛藏經四卷

1 2 7 3 御製佛賦 御製秘藏詮二十卷

1 2 7 4 御製詮源歌 御製佛賦

1 2 7 5 御製秘藏詮二十卷 御製詮源歌

以上四件の經典順序は、天海が踏襲した思溪版の目録<sup>(17)</sup>に照してみると、初めと最後の二件は一致するが、中二件の配列は相違している。なおこの配列は天海版の各經典首題の下に經典順序を表わす漢数字の記載によって明らかにされるところであつて、實際に漢数字は付いていない場合や、胡粉のようなもので白く塗りつぶされている場合が多い。これらの配列

天海版一切経の目録について(松 永)

順序を含め、底本の問題については今後の課題となる。

### 三 まとめ

以上、『印行目録』および『法宝印行目録』と實際の天海版經典との比較を行なつた。

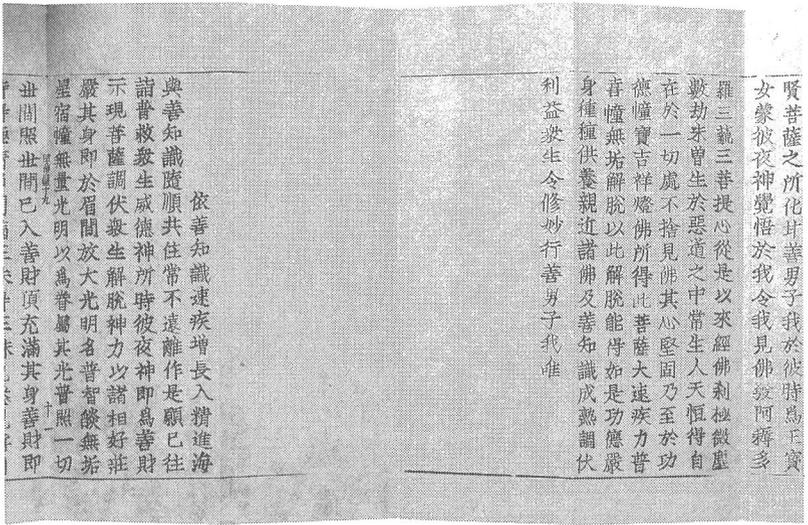
天海版の巻数は實際の帖数と一致し、正しくは五七八〇巻(帖)であり、その經典配列順序も經典名も『印行目録』と一致しない部分のみみられた。天海版一切経の最後を締めくくる刊行目録としてはいささか粗い目録とみることもできるであろう。私としてはこれを刊行予定目録としてあつたものが、完成を急いだために刊行目録として出版されたためであらう、と推定している。

その一例として四十巻本『華嚴經』第十九巻には丁度四百字分の字数が印刷されていない<sup>(18)</sup>。これは底本として使われた明の『萬曆版』一紙分(四百字)に相当するが、あえてこのような誰にでも解る脱文をしていることから裏づけられる。それは完成年の慶安元年が徳川家康の三十三回忌にあたり、天海に慈眼大師という大師号を追贈した年であつたからである<sup>(19)</sup>。

- 1 同書九十九頁(初版は一九六四年刊行)
- 2 現在『天海版一切経』の目録を作成中である。
- 3 五千四百二十五巻があり、これは全巻数の九四%にあたる。

- 4 三九一頁より。
- 5 四〇六頁a。
- 6 第三卷十七紙二四行目。
- 7 四一二頁b。
- 8 大正藏五五卷六〇六頁a。『仏書解説大辞典』第九卷四〇六頁d『菩薩善戒經』の項参照。
- 9 『大藏会展観目録』二二二頁。文華堂刊。  
第二卷十紙。
- 10 第二卷十三紙。
- 11 第三卷二十二紙。
- 12 第三卷二十三紙。
- 13 第五卷二紙。
- 14 第五卷九紙。
- 15 第五卷二十八紙。
- 16 『昭和法宝総目録』第一卷九〇八頁より。
- 17 この脱文によって、底本とした明藏に落丁があったことがわかった。立正大学野沢佳美氏が指摘している天海版の底本問題について、「天海版大藏経の底本について」(『異文化交流』20号)所蔵者を知る手がかりとなろう。写真参照。
- 18 梶浦晋氏より、慶安元年に行なわれた家康三十三回忌の表白・願文ならびに法要作法が観山文庫に所蔵されていることをご教示して戴いた。完成を急いだことを補強する資料としてここに記する。
- 19 本稿がなるにあたり、毘沙門堂のご門跡をはじめ執事長上野良明氏、ならびに石田潔氏には大変お世話になった。ここに記して謝意を表する。

（キーワード） 大藏経、天海版一切経、毘沙門堂  
 （佛教大学助教授）



四十卷本『華嚴経』第十九卷第十紙より第十一紙脱字部分